



付 6 4 話 昔と今 建築における 教育法の変化

今回は、建築の教育方法が昔と比較して少し変化していることについてお話しする。文科省の指示か、学生の気質によるかは分からないが確かに変化が見られる。良いか悪いかは今後の成果による。私が若かった頃の教育法は、基礎から順に専門科目に進み、知識と能力を積み上げていく。カリキュラムも 1 年次は全て教養科目、人間として、また建築家として必要な教養科目が並ぶ。2 年次でも教養科目が多く、多少建築専門の基礎科目が含まれる。3 年次と 4 年次で専門科目を学ぶ。専門的知識を得るまでには時間がかかり、強い動機付けがないと途中で脱落する。

上記の教育法と対局的位置に総合的学習法がある。この学習法が現在の建築学科に取り入れられ、教育手法が変化する。課題を決め、自ら考えて主体的に判断し、問題を解決する資質や能力を育てる。体験型学習や参加型学習あるいはアクティブ・ラーニングの必要性も叫ばれる。参加型学習は、学習過程に参加する学習形態を指す。アクティブ・ラーニングは社会とのつながりを実感し、知識・技能を生活や社会の問題解決に生かしていく力を身につける。ただ、これらの教育法は基礎的知識がないと問題解決の糸口や、課題すら見つけられないという批判がある。

これら新しい教育法がカリキュラムに取り入れられ、教育方法が大きく変化する。ただ、如何なる教育法を用いても、建築教育の目標は、専門領域の基礎知識と能力の開発、価値観の多様性を理解することにある。社会が一つの価値観で統一されると、個人生活は息苦しく、他人をねたみ、嫉妬する元となる。価値の多様性こそ最も大切な概念である。

アメリカの心理学者アブラハム・マズロー (Abraham H Maslow : 1908-1970) が、「人間は自己実現に向かって絶えず成長する」として、人間の欲求を 5 段階の階層で理論化した。これを自己実現理論 (Maslow's hierarchy of needs) という。マズローが提唱した人間の基本的欲求は、5 段階のピラミッド状階層を成し、低次の欲求から次のように表される。(1) 生理的欲求 (Physiological needs)、(2) 安全の欲求 (Safety needs)、(3) 社会的欲求 / 所属と愛の欲求 (Social needs / Love and belonging)、(4) 承認 (尊重) の欲求 (Esteem)、(5) 自己実現の欲求 (Self-actualization)。優先順に並んだ (1) ~ (5) の欲求で低いものから現れ、その欲求が満たされることで初めて次の欲求が現れるという。将来設計や具体的な目標を持たない学生は、何かに属して他者と関わりたいという (3) の社会的欲求や、価値を認められたいという (4) の承認欲

求が希薄であり、ましてや(5)の自己実現欲求が見られない。学びのスイッチを入れるためには、能力を発揮して創造的活動をしたいという自己実現欲求が現れることが必須である。そのためには、まずは(3)と(4)を満たし、次に自己実現欲求が現れる教育法が望まれる。

過去に自己実現欲求が芽生えることを目指し、特異な教育法を実践した建築学科における例を紹介しよう。構造系の T 先生とデザイナーの Si 先生はどちらもお山の大将型教育法を実践した。両者の手法は少し異なるがほぼ同じ。Si 先生は 1 年次に開講される基礎ゼミで多数のゼミ生を募集し、ゼミ生にエリート意識を植え付ける。教育方針に合わない学生はやめ、3 年次になると数人のゼミ生となる。学生には常にスーツを着用させ、細い黒ネクタイを締めさせる。教員と廊下ですれ違うと、直立不動で挨拶をする。時々、仕事で疲れると夜中に Si 先生の部屋に出かけ、お茶とお菓子をごちそうになる。部屋の隅でゼミ生たちがドラフターに向かって図面を引きながら、我々の話を聞く。Si 先生は江戸時代から続く名門の生まれで、子供時代はセレブである。大学時代もエリートで通っていたと思う。世間話としてその時代の話をする。多分学生に聞かせ、君たちも同じだという意識を刷り込む。とても面白い教育法ではあるが、卒業後、社会とのギャップがチョット心配である。

T 先生は 3 年次からゼミ生を取り、ゼミや勉強会、休み中の合宿を通して仲間意識を教え込む。他の先生の介入を極端に嫌うところが両者似ている。多分、自身は意識していないが、特異な環境を作り、他者と関わりたいという社会的欲求や、価値を認められたいという承認欲求を育み、自発的に自己実現欲求が出現する教育法を実践しているのだと思う。ただ、T 先生は卒論や修論の評価で、自分のゼミ生に対し常に満点に近い値をつけるため、他の先生方を不愉快にさせ、論争の種となる。

当時からアクティブ・ラーニングに近い教育法が行われている。建築史の先生はゼミ生を連れて京都や奈良、その他の地域の古建築を見て回り、検分する。また地域事業に参画し、町発展のためのアイデアやイベントを提案する。実際に町の有志と共同作業を行い、村おこしに貢献する。意匠系では、多くの設計コンペや企画コンペに参加する。企画を実際に実施し、多くのことを学ぶ。この種の作業を通して、より多くの知識と経験が必要、常に学び続けることの大切さを知る。

大学では従来の教育法から脱皮し、総合的学習法を組み入れようとしている。建築では昔から実施されてきた教育法が、少しずつ評価されてきたのかもしれない。ただ、いずれの手法を用いても学生の自己実現欲求が現れ、学びのスイッチが押されることが必要となる。